

次の文章を読んで、あとの(1)～(10)の問いに答えなさい。

ずいぶん前、(あ)小学校の頃だったろう。私は家の上空を次々と飛んで行くカラスを、門の脇の塀の上に座って見ていた。この塀は私のお気に入りの場所で、郵便受けに足をかけてよじ登ることができた。郵便受けの青いペンキが剥がれて、金気臭い粉になって手についたこと、よじ登る足や脇腹をこすった塀のザラザラした感触を今も思い出せる。

夕暮れの迫る空を、南から北に向かって、カラスは次々と飛んで行った。そして、口々に「カア」「カア」「カア、カア、カア」と鳴いていた。北の方にある森からは時折、カラスの集団が一斉に鳴き始める声が、遠い波音のように聞こえていた。□々に鳴く声は、(い)言葉を交わしているかのようだ。それなら、これだけたくさんのカラスがいるのだから、呼べば応えるカラスもいるかもしれないと思った。そこで、(う)カラスっぽい声で「かー、かー」と鳴いてみた。

「カア」

「カア」

「カア」

カラスが上空から鳴き返してきた。次々と飛び過ぎる「友人たち」を見送りながら、私は、自分がドリトル先生かシートンになったかのような気分を味わっていた。^①この経験が忘れられなくてカラスを研究しようと決心した、とXは言わないけれども、何の影響もなかったとも(え)言わない。

さて。大学院に入り、それなりにカラスを研究した後、研究者の目で見返してみても、かつての自分の解釈は重大な錯誤を含んでいる可能性に気づいた。それは、「カラスは果たして私の鳴き真似に応えたのか」^Aということだ。

「応える」とは何か。応えたと言うからには、ある個体が他個体の音声^{にんしき}を認識し、その音声に対して反応した、という証拠^{しやうこ}がある。だが自発的な行動と、他個体への反応をどのように区別するか。まして一〇〇羽を超えるカラスが、あるものは自発的に、あるものは返事として鳴いていたかもしれない場合、一体どのように判断すればよかったのか。

これは今から遡^{さかのぼ}って検証することはできない。だが、当時の自分には「

—1—

Y

「という発想すらなかった。人間同士ならば返事をしたと感じられる程度のタイムラグでカラスの一羽か二羽が鳴いた、という事実を、「自分に対して返事をした」と解釈しただけである。だが全く別種の生物を相手に、このような予断をもった判断をしてはいけない。

今なら自分にこう問い返すだろう。「普段からカアカア鳴き続けている相手が(お)その時も鳴いたからって、自分に返事したとなぜ言えるの?」

動物学者として言おう。あのカラスの声が返事であったとしても、それは他のカラスの音声への反応だったろう。私の鳴き真似に返事をしたと考える積極的な根拠はない。

そして、さらに一五年あまり。私は山の中でカラスの分布を調べるため、音声プレイバック法を用いてカラスを探す、という調査を行っている。カラスの声をスピーカーから流すと、縄張りを持った繁殖個体は侵入者だと思つて大声で鳴きながら飛んでくるからだ。

調査を始めた頃は適切な装備も方法もよくわからなかったもので、機材がうまく動かないことや、機材を持っていないこともあった。そんな時でも、「本当にカラスいなのか?」と疑った場合には、失敗覚悟で、自分の声で鳴き真似してみることがあった。とにかく何か刺激を与えてカラスを鳴かせるか飛ばせるかすれば、データは得られるからである。

すると、思つたよりカラスは鳴くのである。こちらの鳴き真似からだいたい五分以内だ。^③しかも鳴き真似に合わせるように、鳴き方を調整しているように思えることが度々ある。こちらが四声鳴けば向こうも四声鳴き、「カー、カー、カアカア」と鳴けば向こうも「カー、カー、カアカア」などと途中で調子を変えて鳴く。もし発声が完全に自発的なものならば、発声の頻度はこちらの鳴き真似とは無関係なものと^Bなり、「鳴き真似の後、数分以内の音声が多い」という結果にはならないであろう。そして、単に「おかしな声が聞こえて驚いたので鳴いただけ」なら、こちらの鳴き真似の特徴と高い確率で一致するのは妙だ。カラスはこちらの音声^{おんしやう}を認識した上で、その音声に反応している——つまり、私の鳴き真似に対して返事をしていてはいか。

—2—

④ この不思議な二重唱がどんな生物学的基盤をもつのか、鳴き真似を本当にカラスの声だと勘違いしているのか、そういった点はまだわからないが、カラスは人間に対して鳴き返してくることが確かにあるのだ、とは言えそうである。

直感から研究を始めなければならない場合は、確かにある。一方で科学者は、状況を説明しうる仮説を公平に捉え、自分に都合の良い結果も疑わなくてはならない。しかし、そうやって疑った先に、思いがけず心躍る景色が広がることもある。

⑤ 今、改めて動物学者として言おう。三〇年以上前のあの日、カラスは私に向かって応えたかもしれないのだ。

(松原始「あの日、カラスは応えたのか」)

(1) この文章には次の一文がぬけています。どこに入れるのがふさわしいですか。その直後の五字を答えなさい。(、。は字数に数えます)

人間同士ならば、その解釈でもよいかもしれない。

(2) (あー)(おー)にあてはまることばを、次のア～オの中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二回使えません。

ア たまたま イ なるべく ウ おそらく エ 決して オ まるで

(3) 線A「か」とB「う」について、同じ働きで使われているものを、それぞれ次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

A		B	
ア	学校には父か母が来ます。	ア	そこまで一緒にいこう。
イ	本当のことしか言わない。	イ	明日はいい天気だろう。
ウ	どこかへ出かけていった。	ウ	今日は新幹線に乗ろうよ。
エ	今何時か教えてください。	エ	彼はこの先苦労しそうだ。
オ	仲良くしようじゃないか。	オ	真実を知っているようだ。

(4) 線①「この経験」とありますが、このときの「私」として大切なことは何であつたと考えられますか。次のア～オの中から最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

ア カラスどうしが会話をしているかのようにあつたこと。
イ 呼べば応えるカラスがいるのではないかと感じたこと。
ウ 実際にカラスに向かって鳴き真似をしてみたこと。
エ カラスが次々と飛び過ぎながら鳴き返してきたこと。
オ 鳴き返してきたカラスに対して親しみを覚えたこと。

(5) X に共通して入るひらがな二字を答えなさい。

(6) 線②「検証」は、「木」のつく漢字と「言」のつく漢字を組み合わせたことばです。次の(1)～(3)には、同じように「木」のつく漢字と「言」のつく漢字を組み合わせたことばが入ります。それぞれ答えなさい。

- ・進学について先生に(1)する。
- ・クラスで交通安全の(2)を考える。
- ・(3)すれば彼の話はすべて作り話だ。

(7) Y に入ることばを、二十五字程度で考えて答えなさい。(、。は字数に数えます)

(8) 線③「鳴き真似に合わせるように、鳴き方を調整している」とありますが、「鳴き方を調整」とするとはどうすることですか。文章中のことばを用いて、二十字以内で説明しなさい。(、。は字数に数えます)

(9) 線④「この不思議な二重唱」とは、具体的にはどういうことですか。それが分かる一文を文章中からぬき出し、最初の五字で答えなさい。(、。は字数に数えます)

(10) —線⑤「今、改めて動物学者として言おう」とありますが、「私」のカラスに対する考えは推移しています。そのことについて説明した次の にはあてはまることばを、字数に合わせて文章中からぬき出して答えなさい。

小学校の頃、「私」はカラスが自分の鳴き真似に対して返事をしたと 的に捉えた。

研究者となり改めて考えると、それは都合の良い解釈から導いた にすぎず、 のうちの1羽が (五字) に対して発した反応でしかないと解釈した。

しかしさらに一五年あまりが過ぎた頃、調査中にカラスが「私」の鳴き真似に反応したことについて、鳴き返したカラスは1羽であるものとみられ、 (四字) 起こった反応であったので、カラスが自発的に鳴いたとはいえず、また、「私」の鳴き真似に合わせて (二字) を変えて鳴いたとみられることから、カラスはやはり「私」に応えたものだ」と結論できて、楽しい気分になっている。

2 次の文章を読んで、あとの(1)～(13)の問いに答えなさい。

僕は小説を書くという行為そのものが好きです。だからこうやって小説を書いて、ほぼそれだけで生活していけるというのは、僕にとっては本当にありがたいことだし、そういう生活を送れるようになったことについては、実に幸運だったとも思っています。実際のところ、もし人生のある時点で破格の幸運に恵まれなければ、こんなことはとても達成できなかったでしょう。率直にそう思っています。幸運というより、ほとんど奇跡と言っていいたいかもしれません。

僕の中にもともと小説を書く才能が多少あったとしても、油田や金鉱と同じで、もしそれが掘り起こされなければ、いつまでも地中深く眠りっぱなしになっていたはず。『強い豊かな才能があれば、それは必ずいつか花開くものだ』と主張する人もいます。が、僕の実感からいえば——僕は自分の実感についていささかの自信を持っています——必ずしもそうとは限らないようです。その才能が地中の比較的浅いところに埋まっているのであれば、^②ホウ^②っておいても自然に噴き出してくるという可能性は大きいでしょう。しかしもしそれがかなり深いところにあるものなら、そう簡単には見つけれられません。それがどれほど豊かな優れた才能であったとしても、もし「よしここを掘ってみよう」と思い立って、実際にシャベルを持ってきて掘る人がいなければ、地中に埋まったまま永遠に見過ごされてしまうかもしれません。僕自身の人生を振り返ってみて、つくづくそのように実感します。ものごとには潮時というものがありますし、その潮時はいったん失われてしまえば、多くの場合、もう二度と訪れることはありません。人生というのはしばしば氣まぐれで、不公平で、ある場合には残酷なものです。僕はたまたまその好機をうまく捉えることができた。それは今振り返ってみれば、まったくのところ、幸運以外の何ものでもなかったという気がします。

しかし幸運というのは、言うなればただの入場券のようなものです。そういう点ではそれは油田や金鉱とは性格をコトにしています。それを見つけて、いったん手に入れたらあとはもうオーケー、^⑥左^⑦ で^⑧安逸^⑨に人生を送れるというものではありません。その入場券を持っていれば、あなたは催し物の会場に入れてもらえます——でもそれだけのことです。入り口で入場券を渡して、会場の中に入れてもらって、それからどのような行動をとるか、そこで何を見出し、何を取り、何を捨てるか、そ

こで生じるであろういくつかの障害をどのように乗り越えていくか、それはあくまで個人の才能や資質や技^⑧の問題になり、人としての器^⑨の問題になり、世界観の問題になり、また時にはごくシンプルに身体力の問題になります。いずれにせよ、それはただ幸運であるというだけではまかないきれないものごとです。

当然のことですが、人間にいろんなタイプの人間がいるように、作家にもいろんなタイプの作家がいます。いろんな生き方があり、いろんな書き方があります。いろんなものの見方があり、いろんな言葉の選び方があります。すべてを一律に論じることはいくらもできません。僕にできるのは、「僕のようなタイプの作家」について語ることではないかもしれません。ですからもちろん限定された話になります。しかし同時にそこには——職業的小説家であるという一点に関して言えば——個別的な相違^⑪を貫いて、何かしら通底するものもあるはずで、一言で言えばそれは精神の「タフさ」ではないかと、僕は考えています。迷いをくぐり抜けたり、厳しい批判をアビたり、親しい人に裏切られたり、思いもかけない失敗をしたり、あるときには自信を失ったり、あるときには自信を持ちすぎてしくじったり、とにかくありとあらゆる現実的な障害に遭遇しながらも、それでもなんとしても小説というものを書き続けようとする意志の堅固^⑫さです。

そしてその強固な意志を長期間にわたって持続させていこうとすれば、どうしても生き方そのもののクオリティーが問題になってきます。まず十全に生きること。そして「十全に生きる」というのは、すなわち魂^{たましい}を収める「枠組み」である肉体をある程度確立させ、それを一歩ずつ着実に前に進めていくことだ、というのが僕の基本的な考え方です。生きるというのは（多くの場合）うんざりしてしまうような、だらだらとした長期戦です。肉体をたゆまず前に進める努力をすることなく、意志だけを、あるいは魂だけを前向きに強固に保つことは、僕に言わせれば、現実的にほとんど不可能です。人生というのはそんなに甘くはありません。傾向^{けいこう}がどちらかひとつに偏れば、人は遅かれ早かれいつか必ず、逆の側からの報復（あるいは揺り戻し）を受けることになります。一方に傾いた秤^{はかり}は、必然的にもとに戻ろうとします。フィジカルな力とスピリチュアルな力は、いわば車の両輪^⑬なのです。それらが互いにバランスを取って機能しているとき、最も正しい方向性と、最も有効な力がそこに生じるようになります。

—7—

これはとてもシンプルな例ですが、もし虫歯がずきずき痛んでいるとしたら、机に向かつてじっくり小説を書くことなんてできません。どれだけ立派な構想が頭にあり、小説を書くこととする強い意志があり、豊かな美しい物語を作り出していく才能があなたに具わっていたとしても、もしあなたの肉体が、物理的な激しい痛みで間断なく襲われていたとしたら、執筆に意識を集中することなんてまず不可能ではないでしょうか。まず歯科医のところに行って虫歯を治療し——つまり身体をしかるべく整備し——それから机に向かわなくてはなりません。僕が言いたいのは簡単に言えばそういうことです。

⑬ とてもとても単純なセオリーですが、それは僕がこれまでの人生において身をもって学んできたことです。フィジカルな力とスピリチュアルな力は、バランス良く両立させなくてはならない。それぞれがお互いを有効に補助しあうような体勢にもっていかなくてはならない。戦いが長期戦になればなるほど、このセオリーはより大きな意味あいを持てきます。

（村上春樹『職業としての小説家』）

(1) 線②⑤⑬のカタカナを漢字に改めなさい。

(2) 線①「破格」と同じことばの成り立ちになっているものを、次のア～オの中からすべて選んで、記号で答えなさい。

ア 破屋 イ 破顔 ウ 破線 エ 破損 オ 破竹

(3) 線③「好機」とありますが、「好機」と同じ意味で使われていることばを文章から二字でぬき出して答えなさい。

(4) 線④「それ」は何のことですか。文章中から七字でぬき出して答えなさい。

(5) 線⑥「オーケー」とありますが、「オーケー」と反対の意味のことばをアルファベット二字で答えなさい。

(6) —線⑦「左□□□」は「気楽で余裕のあるさま」を伝えることばです。ことばが完成するように□に入る文字を答えなさい。また同じように「気楽で余裕のあるさま」を伝える次の1と3のことばが完成するように□に入る文字を答えなさい。入る文字はひらがなの場合も漢字の場合もあります。

- 1 鬼の居ぬ間の□□□□
- 2 □□平楽
- 3 □□□をのぼす

(7) —線⑧「技□□」と⑨「器□□」の□には同じ漢字が入ります。次のア～オの□にこの漢字と同じ漢字が入るものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 製品を実□化する
 イ 処理を高□化する
 ウ 組織を活□化する
 エ 車体を軽□化する
 オ 誤りを正□化する

(8) —線⑩「一律」は「すべて同じで例外のないさま」のことですが、次の1と3の意味になるような「一」を用いた二字のことばを、例の□にあてはまるようにそれぞれ答えなさい。

- 1 土地などの一区切り 例「住宅地の一□□」
- 2 事物の一部分 例「優勝候補の一□□」
- 3 心をひとつにしたまとまり 例「全員が一□□となる」

(9) —線⑪「個別的な相違」とはどのようなことですか。それがわかる部分を五十五字以内でぬき出して、初めと終わりの五字で答えなさい。(、。は字数に数えます)

(10) —線⑫「何かしら通底するもの」とは何のことですか。文章中から三十字以内でぬき出して、初めと終わりの五字で答えなさい。(、。は字数に数えます)

(11) —線⑭「フィジカルな力」⑮「スピリチュアルな力」とはどういうことですか。次のア～オの中からその組み合わせとしてふさわしいものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 生き方の十全さと歩みの着実さ
 イ 肉体の確立と精神の「タフさ」
 ウ 発想の豊かさと意志の強さ
 エ 物理的な力と人間的な力
 オ 痛みの激しさと集中力

(12) —線⑯「車の両□□」のことばが完成するように□に入る漢字を答えなさい。また同じように次の1と3のことばが完成するように□に入る漢字を答えなさい。

- 1 一挙両□ 2 喧嘩両□□ 3 一刀両□

(13) —線⑰「とてもとても単純なセオリーですが、それは僕がこれまでの人生において身をもって学んできたことです」とありますが、「僕」が「学んできたこと」とはどんなことですか。六十字以内で説明しなさい。(、。などは字数に数えます)

次の文章を読んで、あとの(1)～(11)の問いに答えなさい。

昼休みに、男女対抗でドッジボールをした。ヒメは軽やかにボールをよけて、最後の最後まで生き残っていた。

いつもは途中で外野に退場してしまうぼくも、その日はしぶとく生き残っていた。ぼくといっしょに生き残っていたガキ大将が、男子チームのパスをすばやくカットしたヒメに、当てられた。

ガキ大将はくやしがつて、ひとり残ったぼくに命令した。

「いいか。絶対、当てろよ。男のコケンにかかわるからな」

インテリガキ大将が使っていた沽券(コケン)という言葉をも、漢字で書けるようになったのは、ぼくは大人になってからだだった。当時はみんな、男のプライドというような意味で使っていて、使い方はそんなにまちがっていなかったように思う。

ぼくとヒメと一対一だ。男子と女子から声援が飛び交い、まるで宿命のライバルみたい。気分は、^①いやがうえにも盛り上がった。

互角の戦いが続いた。ヒメはぼくをねらい、ぼくはヒメをねらう。お互いが、お互いしか見ていない。

ヒメを討ち取ったら、ヒメはきつとぼくに感心するにちがいない。そのうち、ぼくはそれしか考えられなくなっていた。

ヒメが、疲れてきた。らしくもなく、味方のパスをぼろっとこぼして、ボールがてんでんと、ぼくのほうへ転がってきた。

とっさに拾って、力いっぱい投げつけた。距離が近すぎる、なんて考える余裕は、吹っ飛んでいた。

あつと、みんなが声にならない声を上げた。

ぼくの投げたボールは、ヒメの顔面に当たった。――せめて、腕や足ならよかったのに、よりにもよって、顔面。

パァン―と空気のよく張った音が響いた。ヒメの顔に当たって上がった音なんて、信じたくなかった。

「ご……ごめん」

ぼくの声は、風船の空気が抜ける音のようにしょぼくれていて、Aにしか届かなかった。

ヒメは、うつむいたまま、なかなか顔を上げなかった。やがて、ぐいっと仁王立ちして、鼻をつまんで空を見上げる。

デニムのシャツの胸もとに、黒っぽいしみが飛んでいた。鼻血だ。わあつと、みんなが悲鳴を上げた。

「ヒメちゃん、大丈夫!?」

「ヒコくん、ひどーい!」

女子のかん高い声が、^③四方八方から、ぼくを^④せめ立てる。

「顔面は反則だぞ!」

ガキ大将がぼくをしかりつけた。ぼくの謝る声は、その騒ぎにまぎれてしまい、全然ヒメには届かない。

「ヒメは、顔面セーフだ。ヒコは、失格だ」

もちろんだ。もちろん、ヒメの顔面にボールを当てたぼくなんか、失格だ。だけど、ぼくが失格になったからって、ヒメの鼻血がなおるわけじゃない。

と、ヒメが右手で鼻をつまみながら、左手でガッツポーズをした。そして、女子たちに、

「今日は、女子の勝ちだよ。これは、名譽の負傷!」

そう言った。

みんなが、ちよつと遠慮しながら、笑った。

誰かが、マサ先生を連れてきた。

「おやおや。こりゃあ、わんぱくにやったねえ」

マサ先生は、ハンカチでヒメの鼻を押さえた。

「保健室に行こうか」

こくりとヒメがうなずき、マサ先生といっしょに校舎のほうへ歩き出した。

そのとき、チャイムが鳴った。

「おい、みんなも教室に戻れ」

マサ先生が、振り返ってぼくたちにも声をかけた。

「先生が行くまで、漢字ドリルの続きをやっておきなさい」

いつも、自習時間は男子のお遊びタイムで、消しゴムの飛ばしっこをしたり、落書きをしたり、ろくなことをしていない。女子が「先生に言うわよ」とぶりぶり怒るく

⑤ らいなのだが、その日は、男子もみんな、まじめにドリルをやっていた。ぼくも、しゃにむにドリルの漢字を書いていた。まじめにやらないと、何だかヒメに申し訳が立たないような気がしたのだ。

⑥ 先生は、十分ほどでやつてきた。ぼくは、ドリルを二枚も進めていた。

「先生、ヒメちゃんは何？」

ぼくが真つ先にききたかったことは、女子が先にきいてくれた。

「たいしたことないよ。でも、念のために、この時間は保健室でお休みだ」

よかった——と教室中にほっとした気配があふれた。

「ヒコくんも、もう気にしないようにな。今度から、気をつけなさい」

「はい。ごめんなさい」

ヒメは、六時間目の算数で、戻ってきた。鼻にティッシュを詰めていたが、それでもお人形のようにかわいかった。

ぼくは、ごめんと言いたかったのだけど、女子たちが先に取り囲み、「大丈夫？」と大合唱になったので、近づくこともできなかった。

女子の人垣ひとかきの後ろをうろうろして、あきらめて席に戻ろうとしたときだった。

「ヒコくん」

ヒメが、声をかけてきた。

「次は当てるからね」

そして、指鉄砲ゆびてっぽうをぼくに向けて、バンと打った。

⑦ みんな笑ったが、ぼくだけまだ笑えなかった。

ごめんは、結局言いそびれた。

下校のとき、ヒメと帰るのがいっしょになった。

といつても、いっしょに帰ったわけじゃない。単に帰る方向がいっしょで、ヒメが先のほうを歩いていて、ぼくは後ろを歩いていただけだ。

追いかけて、「今日はごめんね」と謝ってしまえばいい。そうしたら、胸のつかえもすつきり取れる。

⑧ だが、ぼくはなかなか足をハヤめられなかった。謝ったあと、どんな顔をして、どんな話をして歩けばいいのか分からなかったのだ。言うだけ言って、走って逃にげてし

まうという手もあるけど、それには北海道のいなか道は、広くてまっすぐ長すぎる。姿が見えなくなるまで走れなかったら、とても間抜けだ。

⑨ やがて、ヒメが自分の家のあるほうへ曲がる分かれ道がきた。

⑩ 今だ。今、追いかけて、ごめんねと言ってしまえば。ヒメは道を曲がっていくし、ぼくはこのまままっすぐだから、自然に別れられる。

分かっていただけ、やつぱり足は動かない。ボールをぶつけてしまったことが、思った以上にぼくをしばっていた。

笑って流してくれたけど、痛かったにちがいない。投げたぼくが一番よく知っている。男でも、キャッチしたら、手がじーんとしびれるくらいの強さで投げた。

向こうが、振り向いてくれたらな。そうしたら、やあと手をあげて、今日はごめんねって……

前を歩くヒメに、届くはずもないテレパシーを送る。

振り向け、振り向け、振り向け——

と、

「キャッ!?」

ヒメが、急に悲鳴を上げて、頭かかの後ろを抱え込んだ。

「ちよつと！ だれ？」

怒ったように、後ろを振り向く。そして、拍子ひょうし抜けしたような顔をした。ぼくが、ずいぶんと後ろのほうにいたからだ。

「……今、髪の毛、引つ張った？」

疑うようにきかれて、ぼくはぶんぶんと首を横に振った。ヒメとぼくの間は、十メートルほども離はなれていた。ぼくの手はそんなに長くない。

「誰かに、引つ張られたんだけど……」

ヒメは、眉間みけんにたてのシワを刻んで、きよろきよろと左右を見回した。

「誰もいなかったよ」

ぼくは、そう証言した。ヒメの髪の毛を引つ張って逃げたやつなんかない。いるとしたら、透明人間だ。

「ランドセルに、引つかかったんじゃない？」

「そうかなあ」

ヒメは、背中に背負った赤いランドセルを、肩^{かた}ごしに見やった。
「ごめんね」

「え？」

⑪ ヒメの顔がケワしくなった。

「やっぱり、ヒコくん？」

「ちがうちがう」

ぼくはあわてて両手を振って、全否定した。

「ドッジ。ぶつけてごめん」

⑫ 「なあんだ」

ケワしい顔が、ぱっと笑顔に切りかわった。

「もういいよ。わざとじゃないし」

「うん。ごめん」

「いってば」

じゃあね、とヒメが道を折れていった。ぼくも、道をまっすぐ行つた。

B は、すっかり取れていた。

C みたいだったなと思った。

考えてみれば、このとき、転校の日の朝以来、初めてヒメと D でした。

べった。

(有川浩『だれもが知ってる小さな国』)

(1) 線④⑧⑪のカタカナを漢字に改めなさい。

(2) 線①「いやがうえにも」⑩「拍子抜けした」のここでの意味としてふさわしいものを、それぞれ次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ① いやがうえにも
- | | |
|---|----------|
| ア | よりいっそう |
| イ | よくも悪くも |
| ウ | 無理やりにも |
| エ | いやいやながら |
| オ | 否定できないほど |

- ⑩ 拍子抜けした
- | | |
|---|----------------|
| ア | 予想外の様子にこまった |
| イ | つまらなくてがっかりした |
| ウ | 氣勢がそがれてとまどった |
| エ | 張りつめた気持ちが変わらぬ |
| オ | 意外なことにおどろきあきれた |

(3) 線②「余裕は、吹っ飛んでいた」とありますが、このときの「ぼく」の様子の説明として、次のア～オの中から最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

ア せいっぱいガキ大将の期待に応えようとがんばっている様子。

イ 戦いが長引き、何も考えられなくなるほど疲れてきている様子。

ウ 周囲の声援で、どうしようもなく気分が盛り上がっている様子。

エ 勝ってヒメに認めてもらいたい一心で、必死になっている様子。

オ 長引く接戦を制するために、ヒメのことだけを見つめている様子。

(4) A にあてはまることを考えて五字以内で答えなさい。

- (5) —線③「四方八方」は漢数字をふくんだ四字のことばです。次の□に漢数字をあてはめてそれぞれことばを完成させるとき、a s f の和はいくつになりますか。漢数字で答えなさい。

朝 a 暮 b c 死 d 生 e 海 f 山

- (6) —線⑤「ぼくも、しゃにむにドリルの漢字を書いていた」とありますが、このときの「ぼく」の様子を、五十文字以内で説明しなさい。(、。などは字数に数えます)

- (7) —線⑥「十分」とありますが、「十分」には次の例のように、異なる読み方もあります。

例 十分後に始める。
水はこれだけあれば十分だ。

次の1と3の□には、それぞれ同じ漢字を用いた熟語で読み方の異なるものが入ります。その熟語を答えなさい。

- 1 □ それは決して□ではない。
□ を尽くして天命を待つ。
- 2 □ □ が背筋を走る。
□ □ が関東地方に流れ込む。
- 3 □ □ 彼は日本画の□だ。
□ □ に家賃をわたす。

- (8) —線⑦「みんな笑ったが、ぼくだけまだ笑えなかった」とありますが、これはどのような様子を表していますか。四十五文字以内で説明しなさい。(、。などは字数に数えます)

- (9) —線⑨「今だ」とありますが、「ぼく」はなぜ「今」だと思ったのですか。これを説明したものとして、次のア～オの中から最もふさわしいものを選んで、記号で答えなさい。

ア ヒメをケガさせたことが気になっている今謝らなければ、自分はすっかりとした気持ちにならないから。

イ ヒメが分かれ道を帰っていく今謝らなければ、もう今日のうちにヒメに謝罪する機会はないだろうから。

ウ ヒメにテレパシーで思いが伝わった今謝れば、ヒメと今後ぎくしゃくすることもなくなるはずだから。

エ ヒメと別れる場所にさしかかった今謝れば、謝った後のことをあれこれと考えなくてもよくなるから。

オ ヒメがケガのことを笑って流してくれた今謝れば、おそらく自分とヒメとの関係は元通りになるから。

- (10) —線⑫「なあんだ」とありますが、「ヒメ」は何がわかったのですか。これを説明した次の文の□に、あてはまることばを、それぞれ字数に合わせて、文章中からぬき出して答えなさい。

ヒコが¹□(八字) たわけではなく、²□(九字) たことについて謝ったのだということ。

- (11) □ s □ D にあてはまることばをそれぞれ文章中から解答らんの字数に合わせ、ぬき出して答えなさい。

受験番号	
氏名	

氏名

(1)

(2)	あ	
	い	
	う	
	え	
	お	

(3)	A
B	

(4)

(5)	
(6)	1
	2
	3

[illegible][illegible]

(9)

(10)
a
b
c
d
e
f

(1)	
(2)	
	つて
(5)	
(13)	
	びたり

(2)

(3)

(4)

(5)

(7)		(6)	左
			●
(8)	1	1	鬼の居ぬ間の
	一		
	2		
	一		
	3		
	一		●
		2	
			平楽
		3	
			をのばす

(9) 初め
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
終わり  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

(10)
初め
終わり

(11)

(12)	車の両	
1	一挙両	
2	喧嘩両	
3	一刀両	

[illegible]

[illegible]